突然に時空間を超越するランニング・ミュージックを楽しみながら……

山内　進

何時でも何処でも気軽に音楽を楽しむことを可能にしたiPodのおかげで今では多くのランナーがイヤホンで音楽を楽しみながら走っているが、僕もランニングの時はいつでも音楽と一緒である。僕はほぼ毎日のようにランニングを楽しんでいるので音楽はいつも耳元にあると言ってもいいのだが、どのようなジャンルの音楽が好みなのかと尋ねられると即答できないのが少し面映ゆい。音楽については多くの人がある種のこだわりを持っているのが普通で、例えば、村上春樹は、CCRやBeach Boys, Red Hot Chile Peppersなどシンプルなリズムのロックがランニングのリズムに合うと書いているし、ジムでは軽快なラテン音楽のリズムが欠かせないという友人もいる。僕のiPodはバラエティに富んでいて、音楽のデパートといえば聞こえはいいが、実際には何でもありのチャンプルー・ミュージックの我楽多市場である。Vivaldiなどのクラシック音楽からMiles Davisを始めとするジャズ、Eric Claptonなどのバラードもあれば、Bruce Springsteenなどのロックも相当数入っている。また若い時に暫くテキサスにいたのでWillie Nelsonの歌うカントリーも好きだし、先週はBilly JoelやIsrael Kamakawiwo'oleをお供に走っていた。最近は和製ポップス、更にヤナワラバーなどのウチナー出身歌手も楽しんでいるのだから、我ながら余りの無節操ぶりに呆れてしまう。

その日その日の気分で音楽を選んでランニングに出かけるのだが、最近Suzy BoggusのRed River Valleyを聞いている時に突然、高校時代、山原に友人数人でキャンプに行った時のことを思い出した。その時に川辺で聞いたのがこのAmerican Folk Songだったのだ。音楽が何の前触れもなく、突然に時空間を飛び越えて脳の片隅に残っていた記憶の断片を呼び覚ますことが出来るのを知ることは驚きであり、嬉しい発見であった。ひょっとしたら、音楽を聴くことで脳を刺激し、認知症予防に効果があるかもしれないなどと自分勝手なことを考えながらiPod片手にランニングに出かける昨今である。

（やまうち　すすむ）

La musique, une compagne qui rythme notre vie

Laurent Annequin

Bien que n'ayant malheureusement aucune prédisposition pour la musique, cette dernière a toujours tenu dans ma vie une place importante en tant qu'auditeur.

Je me souviens que déjà tout petit, je voulais écouter sans arrêt le même disque au désespoir de mes parents. À cette époque, notre stéréo était de la taille d'un meuble. Un peu plus tard, à l'âge de six ou sept ans, on m'a offert mon premier mange-disque. La qualité n'était pas au rendez-vous, mais la liberté oui. Ce fut pour moi, le premier produit nomade qui allait me permettre d'écouter mes disques n'importe où. Vers mes 11 ans, la qualité du son est devenue un élément de plus en plus important. J'eus droit alors pour mon anniversaire à ma première chaine compacte. J'étais rentré dans le monde fabuleux de la Hifi ! Si bien que vers l'adolescence, j'ai commencé à investir tout l'argent gagné pendant les vacances dans du matériel de plus en plus sophistiqué et coûteux. Aujourd'hui, je me considère au paradis, car pour un coût beaucoup plus raisonnable, le numérique permet d'écouter à tout moment l'intégralité de sa discographie avec une qualité remarquable. C'est un rêve devenu réalité comme dirait une célèbre marque.

L'autre aspect important de la musique à mes yeux, ce sont les genres qui évoluent avec l'âge et les rencontres. Alors que mes premiers 33 tours étaient consacrés à la musique pop du moment, je me suis tourné vers le hard rock au lycée sous l'influence de mes amis « rebelles ». Jeune adulte, mes goûts se sont adoucis pour se focaliser à la fois sur le rock progressif et la New Wave anglaise. Puis, un peu plus tard, vers la musique New Age, sans doute pour décompresser après le travail. Au fil des ans, les étiquettes et clivages se sont envolés et je me suis mis à écouter tous les genres de musique, de la musique française au classique et même de l'opéra. Aujourd'hui, j'essaie d'écouter de la musique en famille pour faire découvrir différents artistes à mes enfants. Rien n'est plus propice qu'un trajet en voiture pour partager un moment d'allégresse et de découverte.

（アヌカン　ローラン）

第一楽章だけでいい

西川真子

ラフマニノフ作曲『ピアノ協奏曲第二番』。打ちのめされた時に、追い打ちをかけるように聴くのがいい。第一楽章を、何度も。陰鬱で不安を掻き立てる音の流れから始まるものの、再生に向かう物語を三十分間程でたどるのは、気持ちに余裕が無いと難しい。

馬鹿な失敗には教訓という札を付けて早く忘れるのが良いと、頭で分かっていても出来ない時は、気分に応じた方向に漂いたい。楽しい時は何をやっても楽しいし、特に音楽に気が向かない。たまたま耳に入ってきた音に身をゆだねているだけだ。それはそれで心地よい。身の周りには音楽が溢れかえっていて、偶然聞こえてきた音に自分の感情が寄り添っていく。

音楽の扱いがぞんざいな家に育った。レコードもCDも家には一枚もなかったし、コンサートに出かける習慣もなかった。家族そろって音楽が嫌い、ということでもなかったのに、何故だろう。家の中で音楽の優先順位が低かった、歌や楽曲の調べを聞いて楽しむことが無かったということか。親たちはそれぞれ手仕事が好きで、作業中に話しかけると叱られた。手を動かしている時に音楽をかけたり、鼻歌を歌っていたという光景を思い出せない。

学校の音楽の時間は好きだったし、そこそこやっていたと思う。ただ、歌ったり楽器を演奏するよりも、教科書に載っている楽曲や歌の楽譜よりも、その横に添えてある作曲家の生い立ちに眼がいった。

音楽が無くても、生きていけるだろうか。無いなら無いで、それなりにやっていくのだろうか。

ラフマニノフの『ピアノ協奏曲第二番』。一九二九年、作曲者本人がピアノを演奏したという版を聴くのが好きだ。くぐもった旧い音はこの人の言葉のように響いてくるからだ。この曲の第一楽章だけ入ったCDが有ればいいのに。

（にしかわ　まこ）

琴を習う

鵜飼尚代

大学生の頃、琴を習ったことがある。教養の二年生、「暇になった」と思えた。暇な時間をどう使うか。私にとって読書は暇つぶしではない。部活動はせず、アルバイトを増やす気もない。そして、チャレンジがしたくなった。そこに浮上したのが音楽だった。

それまで音楽と特別な関わりをもったことはなかった。だから、今さら五線譜とにらめっこをする気にはなれず、和楽器の演奏を目指すことにした。三味線か琴か、三味線は音を取るのが難しいと聞くので、琴にした。

意を決して小さなカルチャーセンターに行き、そこで週に一度マンツーマンで琴を習うことになった。琴の先生はコトのほか美しかった。今なら草刈民代のようだと言ったであろう。スラッと背が高く、色白で、凛としている。おしゃべり好きで弾むような笑い声。だが、目が不自由でいらした。しかし、はじめて琴と向き合った私の不安を見透かすように、簡単よ、ほら音を出して、とさりげなく導いてくださった。以来私は琴に夢中になり、美しい先生の元に通うことが楽しくて、なけなしの貯金をはたいて琴も買った。

琴の音は心に浸みる。が、練習曲は聴き慣れないものがほとんどで、メロディーがつかめない。琴に触れるのは好きだが、曲を正しく弾いているかどうか覚束なかった。

孔子は、弟子の子路の琴の音を聞き、なにも私のところで弾かなくても（由之瑟、奚為於丘之門）、と言ったという。子路は趣味で琴を弾いたのではなく、君子になりたくて琴の練習をしただろうから、師の一言をどう受け止めただろう。私は暇つぶしで琴を習いはじめたのだが、上手になりたくなっていた。琴の上手を考えると子路のことが思い起こされ、子路には何が欠けていたのだろうと思うこともあった。

大学での勉強は学部に入って厳しくなった。三年生はなんとか持ちこたえたが、四年生になると日々琴の練習というわけにはいかない。終に美しい先生の元を去ることにした。目標にしていた「春の海」まで行き着けなかった。「春の海」を弾きたいものだと、今も思う。

（うかい　なおよ）

モリソン先生の音楽経歴

ライアン・モリソン

不毛とまでは言わないが文化的に遅れている米国西部アリゾナ州フェニックスで生まれた僕は五才の時にピアノ稽古を始めた。週に一度田舎教師が我が家に来てレッスンをし、年に一度その他の生徒達と集まり田舎なりの発表会を行う、という形であった。他の生徒達と比べて僕は遥かに上手だったので、田舎者の我が親やその教師に音楽の天才扱いをされ僕は思い上がり自分でも自分のことを天才だと思うようになった。その調子で高校ではピアノ稽古を続けつつ、ジャズバンドにも入り更に友人たちとパンクロックバンドも形成していた。大したバンドではないが唯一自慢出来ることは名バンドのニルヴァーナがまだ有名でない頃フェニックスに来てライブをしたのだが、その前夜に同じ店でライブをした、という珍事だけである。

ピアノ試験の結果で奨学金を授与され某私立大学に入学した僕は、クラシック音楽を専攻するつもりでいた。しかし、カリフォルニア州のその大学には、米国のみならず世界諸国から一流の音楽教育を受けてきた学生達が集まっていた。ピアノの授業で他の学生達の演奏を聴き、田舎と都会の「天才」の基準をまざまざと見せつけられ僕は愕然とした。また、彼らの練習量の多さにも驚き、怠け者の僕に勝ち目はないと気づいていった。だが、ピアノ演奏の技術は劣るにしても、自分の音楽的才能は長けていると依然として自信を持っていたので、作曲の授業には熱心に取り組んでいた。しかし、ある日に僕が自作のラフマニノフ亜流のピアノ曲を演奏し終えると、七歳の少年が突然教室に入ってきて、ピアノの前に座り、つい今しがた僕が演奏した曲をそっくりそのまま再現して弾くという事件が起きた。つまり、我がオリジナルの未発表曲を一度聴いただけで全部覚えてしまっていた。これがやはり最後の一撃となり、優秀な他の学生たちの才能と勤勉さに圧倒された僕は、音楽の道は諦め、より悠々と出来るであろう文学を専攻することにした。そして、毎日詩集を片手に海辺に出るようになった。ちなみに、モーツアルトを彷彿とさせるその少年は、名はキット・アームストロングと言い、現在では世界中で活躍する著名な音楽家となっている。

音楽を生業とする夢は断念したが、今でも素人なりにピアノやギターを弾き、音楽とともに生きている。我が演奏ビデオが Youtube 上にあるのでご参照ください（笑）。

（もりそん　らいあん）

記憶の鍵

三品由紀子

昔よく聴いた音楽を久しぶりに耳にすると、当時の記憶がふと蘇る。始めはくっきりとした記憶ではないが、楽しさや切なさをぼんやりと感じる。曲を聴き続けると笑ったことや幸せだったことを思い出せる。様々な感情が曲の流れと同時に風に吹かれてきたように舞い上がる。沢山の素敵な音楽に囲まれて生活していくと、思い出が曲と共に呼び覚まされる。

最近、知り合いが「時」について話してくれた。「流れる『時』は降り積もっているかもしれない」と。「時は流れない。雪のように降り積もる」は五年前の読売新聞「編集手帳」に載っていた言葉でもある。昔のことを思い出すには音楽より写真と思う人が多いかも知れないが、久しぶりに聴く曲は懐かしい昔の写真以上の場合がある。音楽はセピア色の思い出に、また新たな思い出がレイヤーのように追加されていくからだ。写真は流れる時の一瞬を記録するが、音楽は当時の記憶とその後に聴いた思い出まで降り積もっていく時間を記録していく。

私にとってスメタナの「わが祖国」の第二曲「モルダウ」は思い出深い音楽である。フルートの演奏から始まるこの心をとりこにする美しい曲は、何回聴いても感動する。高校のときオーケストラの一員としてフルートを担当し、この曲を何度も繰り返し練習したからだ。

当時は「モルダウ川の流れを描写している」としか理解していなかった。今ではダイナミックな人生そのものが描かれているような気がし、それゆえにこの曲を聴く度に、その頃、必死に練習した記憶や大切な人と過ごした時間が戻ってくる。同時に、この曲を聴きながら話した最近の会話や空気も、すべての思い出が「モルダウ」の音に重ねて積もっていることに気がつく。音楽は時間の幅を記録する記憶の鍵だと感じる。音楽を聴けばよみがえってくる過去の記憶のために「あの頃」と「今」を大切にしながら音楽をもっと聴き続けたい。

（みしな　ゆきこ）

53 Ac. Piano

竹内慶至

私の音楽との出会いは最悪なものであった。

子どもの時にエレクトーンを習わされることになったというのが、その最悪な出会いである。練習が大嫌いで、家ではほとんど練習をしなかった。習い事の時間になるとどこかに隠れていなくなってしまうので、私の母は、家に先生をよんで練習させようとしていた。そもそも、人からやれと押し付けられてすることが何よりも嫌だった。

発表会のあの雰囲気も好きにはなれなかった。大勢の女子たちに混じって男子がぽつんとひとり。しかも白タイツに半ズボンというダサい衣装つき。耐えられなかった。

最悪な「出会い」ではあったが、五年間ぐらいは習っただろうか。あまり良い思い出ではないため、正確に何年間習っていたのか覚えていない。

ところが、そんな最悪の出会いをした音楽と中学校三年生の時に「再会」することになる。しかも、自ら望んで、である。古くなったエレクトーンを家の建て替えの際に処分するということで、代わりにシンセサイザーを買ってもらった。

元々、このエッセイには「音」の話だけを書こうと思っていた。タイトルの53 Ac. Pianoというのは、ローランドから出された、あるシンセサイザーのプリセット五十三番のピアノの音色（おんしょく）のことである。この音色は九〇年代に大ヒットした楽曲たちのいくつかに使用されている音色である。多くの人は、その音を聞けば「ああ、あの音か。」と思うに違いない。

なぜ音のことだけを書こうとしたのか。答えは簡単である。音色や音というものは音楽を構成する最も基本的なものであるにもかかわらず、注目されることが少ないからである。たとえ誰かの音楽が売れてヒットしたとしても、注目されるのは歌詞やメロディばかりである。だが、本当は、そのようなヒット曲のベースには、メロディを構成する「音」とその音を生み出す「楽器」が必ず存在している。

音楽にはまるというのは、メロディや歌詞の世界観に惹かれてということが多いとは思うが、私の場合はどうやら「音」に取り憑かれていたようだ。

「楽曲」は嫌いだけれども、「音」が好きということがある。天邪鬼な私の性格はこうやって作られたのだなと納得した。（たけうち　のりゆき）

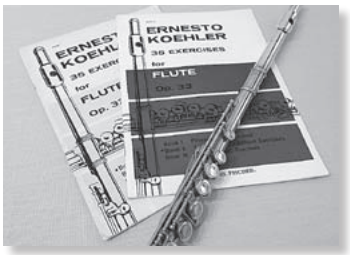
フルートと私

今泉景子

私にとって音楽と言えば、フルート。せっかくなので、フルートとの出会いやそこから得たものについて書いてみようと思う。

「あら。あったわ。」母が古びた黒い長細いケースを持ってきて私に渡した。硬い金具をカチッと開けると、紺色のフェルト生地が敷き詰められたケース内にシルバーに輝くフルートがあった。見た瞬間に「これを吹きたい！」と思った。私とフルートとの出会い。中学一年生の時である。

中学に入学した私は、迷いなく吹奏楽部に入部を決めた。最初は、母のお古のフルートを使う予定だったが、周りの友達が新しい楽器を買うことになると、私も欲しくなった。連日、親におねだりをしたが、父は頑として買おうとしてくれなかった。そんな姿を見かねた母が自身の初めてのボーナスで私にフルートを買ってくれた。当時の金額で十五万円。本当にうれしくて、私の学生時代は常にこのフルートを大事に抱えながら過ごしていた。中高の六年間、仲間とコンクール入賞を目指して練習に励んだのがとても懐かしい思い出である。



フルートが私にもたらしてくれたものの一つは、多くの人との出会いやつながりである。学生時代にホームステイした際も、言葉は通じなくても、フルートを吹けばすぐに心は通じ合えた。社会人になってからも、演奏活動を通して多くの方と出会い、つながりを持つことができた。同じ楽器を吹いているというだけで、親しみを感じ、仲間意識が芽生えるのは不思議なものである。また、呼吸法や人前で演奏することでついた度胸もフルートを続けていたからこそ身に付けられたものだと思う。人前で話す機会が多くなった今の私にとても役に立っている。改めて振り返ってみると、何気なく始めたフルートが私にもたらしてくれたものが多かったことに気が付いた。しばらくご無沙汰しているので、そろそろ再開しようか。これからどんなことが待っているのか、楽しみになってきた。

（いまいずみ　けいこ）

私にとっての「翼をください」

吉富志津代

音楽と言えば、一九七〇年代の、いわゆる日本のフォークソングが頭に浮かぶ。元来フォークソングは民謡や民俗音楽をさすが、民謡から派生したポピュラー音楽で反戦歌なども含まれる。小・中学校時代、吉田拓郎や井上陽水などに感化されて高校ではフォークソング同好会でギターを手にバンド演奏もしていた。

団塊の世代の多くが全共闘運動や安保闘争などの学生運動に熱をあげて、あさま山荘事件でほぼ終焉を迎えるまでを、私たちは小学生ながらみていた世代である。そして、運動が社会を何も変えないのだと妙に納得していた四無主義（無気力、無関心、無責任、無感動）の世代と言われていた。

その世代にとって、あの気だるいような開き直った語り口で厭世的に自由に歌うスタイル、あるいは純粋な気持ちを素直に歌詞として表現するような曲は、「あきらめ」と表裏一体としての「期待」の二つの側面から共感を生み、フォークソングをヒットさせた。

私もその一人だった。自分が住む社会や自分の存在に期待も落胆もせず、特段の努力もせず、自分のしたいことだけに関わり、ただ淡々と暮らしていた。それなのになぜか特に好きな曲は、赤い鳥の「翼を下さい」で、自分のバンドのレパートリーのひとつだった。

時を経て、現在の私は約二十五年前から市民活動団体を立ち上げ、昔の学生運動とは違った手法での社会運動を続けている。大学で教育に携わる立場となり、学生たちに自分の経験やその延長線上に広がっていった研究内容を伝え、ともに考えている。いま翻って考えると、開き直った自分の大学時代に「翼を下さい」は、いつのまにか私の人生の深層心理に影響をあたえていたらしい。

あの「翼を下さい」は、その後に教科書にも掲載されて今では合唱曲として学校現場でも採り上げられ老若男女の多くの人たちの愛唱歌になっている。しらけた時代にあって、「この大空に翼を広げ飛んでいきたいよ～」と希望に満ちた歌詞と伸びやかなメロディは、いまでも同世代とカラオケにいくと歌いたくなる曲のひとつである。

（よしとみ　しづよ）

What music do you listen to?

Eric Gondree

I have never been able to answer this question very well, not even for myself. Furthermore, I had found that people would sometimes judge me based on my taste of music, and that kind of judgment was something I generally preferred to avoid. Regardless, the kinds of music I listen to deny an easy form of categorization and, when I look through my collection, no pattern seems to emerge. I would say it is an eclectic list of songs, ranging from Tchaikovsky to late '80s rock to mindless obscure things you'd have heard in nightclubs circa 1996. Even though music is definitely present in my life, it is not an extremely important part. This is made clear to me whenever I compare myself with friends who are intensely into their music and go through the trouble of attending live concerts regularly.

One feature that has shaped my music listening is the technology that I have used. In the '80s, most of my friends used tape recorders to splice their own music mixes or would even use them to (badly) record songs off the radio; nobody does this anymore, these are arts which have been lost to time. As for me, rather than acquire CDs, most of my music has been in digital format for the last twenty years and I used my computer to play my music in the early '90s, back when it was considered a fairly new and unusual way to do it. My collection dates from the mid-to-late 1990s and early 2000s and it was mostly acquired from caches of shared files at college or the now-forgotten days of illegal online file-sharing services like Napster and LimeWire. The recording industry hated these network-based music-sharing systems for good reasons and this made them seem more perversely appealing. I was an early adopter of the iPod back in 2002 and I enjoyed observing how digital music became easier and more widespread for everybody to use over the years.

In the past, I mainly listened to whatever was playing in the background or on the radio while I was driving. My friends were not a very big influence on what I listened to. Mainly, I think I enjoy music which helps me to remember special times in the past. Apart from that, the music which is most important to me sounds uplifting and provides a comforting background ambience that can help me work.

What music do I like? I only know it when I hear it.

（ゴンドリー　エリック）

Popular Music Since 1945

Allan Goodwin

Prior to majoring in the history of classical music as one of two majors for my undergraduate degree (the other is English), I took a first-year course, Popular Music Since 1945. This course changed the way I thought about music as a whole more than any other course I would take throughout my major.

It was divided in two halves- the first being the development of African American music in the United States leading up to different genres of rock and other urban popular music that many people see as separate, including rap / hip hop and electronic popular music.

Thanks to this first half, the music I made in my free time changed from working mostly with computer based synth-pop while thinking of it as being somehow different than other types of modern music, to being obsessed with blues music, especially the music of John Lee Hooker, Muddy Waters and Howlin' Wolf. I taught myself a bit of fingerstyle acoustic guitar and harmonica playing based on minor pentatonic scales. I still play this type of music on various instruments to relax.

The other half of the course was the development of country music in the US as a development of different types of traditional folk musics from European countries meshed and melded together. The professor told us that this second half of the course is where students disappear and often end up failing to pass the course. The reason for this is obvious: nineteen or twenty-year old university students in Toronto, Canada are far more likely to listen to some sort of urban rock music in their free time than a genre of country music.

From the second half of the course I learned to look at the societies that produce a kind of music, rather than judging music based either on my own feelings about it or on its complexity. In more rural areas of the United States (and Canada as well, incidentally) country music is an important part of life, and understanding what music means to people and its role in society is often the point of music history degrees. This focus on societies and the way things function in them was important for success for both of my undergraduate majors (as it would be for any liberal arts major), and is also important in cross-cultural communication and sociolinguistics.

（グッドウィン　アラン）

Punk and Youth

James Amrein

Punk is a music genre which embodies energy, freedom, and good times. Some of my earliest musical memories are classic punk albums like Green Day's "Dookie" and The Offspring's "Smash". These two punk albums were a far cry from the dirty, angry sounds coming from London in the late 1970's. Instead, the punk bands I grew up with embodied a brighter energy powered by the southern California sun, and their impact has lasted until the present day.

Gogol Bordello is a punk band that exemplifies the expatriate spirit that I feel from living abroad for many years. The band members come from all over the world and are all different ages. They play accordions, violins, saxophones, drums, and sing in a multitude of languages: Gogol Bordello's music style is punk, but it's an eclectic mix of new and old that creates a new sound called Gypsy Punk. Listening to Gogol Bordello makes you happy and gets you moving to the music. I love it.

So imagine me dancing in what's called a mosh pit at a Gogol Bordello show. Mosh pits are a chaotic circle of people dancing to the beat of the music at the front of the stage at a punk show. They are hot, sweaty, slightly dangerous, and a great time. I was drenched in sweat, some of it mine, and then a really fast tempo song started. The mosh pit gets started, I go along with it, and as I'm dancing my glasses fall off of my face and onto the floor.

Out of all the concerts I have been to (and I've been to many), this is the first time I lost my glasses. In the middle of a mosh pit you are never in the same place long and even as I tried to reach down for my glasses I was swept along with the crowd. My glasses were gone and I was blind. Losing the ability to see was just fine as the Gogol Bordello concert is an aural pleasure to be listened to. I didn't stop enjoying the mosh pit or the music because I was couldn't see.

By the end of the concert I did find one of the arms of my glasses. It was under my foot during a break in the music and I pocketed it. It is framed along with my concert ticket as a reminder that I was once young and that punk is amazing.

（アムライン　ジェームス）

This is my song!

Scott Bowyer

Every generation has its defining song. You know what I'm talking about, that song that used to send you and all of your friends in to a frenzy when it came on at the club. It had this magical power to just catch everybody and blast them down a roller coaster of highs and lows. For the three or four minutes that the track was playing you'd be lost in another place, a higher dimension with floors made of feeling and walls made of power.

For those millennials like me who were in our teenage years after the year two thousand, it was the music of the noughties that called out to us and defined our passage from childhood to physical and mental maturity. Some might point to blink-182 and their amazing skate-rock anthem All The Small Things as the defining song of the decade. Others might tell you that The Strokes' Last Nite is THE song of the noughties. Those people would be wrong.

The band that truly defines millennials and calls out to their combination of old-school rock, new-school angst and organic, locally grown coffee beans? The Killers. The song? The one that grabs you by the heartstrings and gives a good, hard tug. The one that reminds you of all those times you wanted to ask her out but couldn't quite work up the courage. The song that rolled up all those teenage torrents of love, jealousy and self-awareness and fired them back at you with a side-serving of gorgeous guitars and heartbroken lyrics; Mr. Brightside.

What made Mr. Brightside so special was the way it was able to combine those typical teenage feelings of angst and almost-uncontrollable passion with the self-coaching and attempts at positivity that we were all inevitably involved in at that age. Let's be honest, we all had that one obsession, that girl or guy who we couldn't stop thinking about. They were unavailable, and we couldn't stop thinking about it. *Now they're going to bed and my stomach is sick And it's all in my head.* But we had that little voice inside us telling us it would all be alright, we'd get over it. *Destiny is calling me...cause I'm Mr Brightside.* Backed up by incredible, upbeat guitars, Brandon Flowers' tortured lyrics perfectly encapsulated our tortured, trying souls and lifted them up to new heights. That's why every time this song comes on, even now, you'll hear shouts of "This is my song!" all over the room, people will start hugging each other and begin playing the air-guitar. Stand up, The Killers, you made the song that defined a generation of Millennials and we salute you!

（ボイヤー　スコット）

執筆者一覧

私の音楽論

フランス語学科	林　良児
フランス語学科	小山美沙子
国際ビジネス学科	篠崎ひさこ
現代英語学科	佐藤雄大
世界共生学科	高瀬淳一
世界共生学科	小野展克
世界共生学科	松本純子
英語教育学科	Juanita Heigham
世界教養学科	Douglas Wilkerson
現代英語学科	Lucy Glasspool
言語教育開発センター	Iain Maloney
フランス語学科	Jérôme Paccoud
言語教育開発センター	Etienne Marceau

思い出の人、思い出の音

英米語学科	ハンフリー　恵子
フランス語学科	大岩昌子
フランス語学科	伊藤達也
世界教養学科	諫早勇一
世界教養学科	野谷文昭
世界教養学科	ヴァミューレン服部美香
国際ビジネス学科	阿部彰彦
国際ビジネス学科	小林洋哉
国際ビジネス学科	蕎麦谷　茂
世界共生学科	濱嶋　聡
英米語学科	Philip Rush
学長、ワールドリベラルアーツセンター長	亀山郁夫

旅、異国で出会った音

英米語学科	福田眞人
英米語学科	梅垣昌子
英米語学科	甲斐清高
英米語学科	新居明子
英語教育学科	Paul A. Crane
英語教育学科	高橋直子
フランス語学科	武井由紀
フランス語学科	Yannick Deplaedt
中国語学科	三枝茂人
日本語学科	齋藤　絢
現代英語学科	ムーディ美穂
世界共生学科	地田徹朗
世界共生学科	堀部純子

私の音楽史

英米語学科	山内　進
フランス語学科	Laurent Annequin
中国語学科	西川真子
世界教養学科	鵜飼尚代
世界教養学科	Ryan Morrison
現代英語学科	三品由紀子
国際教養学科	竹内慶至
国際教養学科	今泉景子
世界共生学科	吉富志津代
言語教育開発センター	Eric Gondree
言語教育開発センター	Allan Goodwin
言語教育開発センター	James Amrein
言語教育開発センター	Scott Bowyer